

佐藤一斎著 川上正光全訳注「言志四録(二)、言志後録」講談社 学術文庫 1979年3月10日刊を読む

学の工夫

虚^{きよえい}嬴^{ひと}の人は、常^{つね}に補^{ほざい}劑^{ふく}を服^{にわか}せり。俄^そに其^{こう}の効^{おほ}を覚^{しか}えざれども、而^{ひさ}も久^{ふく}しく服^{おのずか}すれば、自^{こう}ら効^あ有り。此^この学^{がく}の工夫^{くふう}も亦^{また}猶^なお是^かくのごとし。

〔訳文〕

身体の弱い人は、その弱さを補う薬を常用している。この薬は飲んですぐに効果が現われるというものではないが、長く飲んでいると自然に効果があるものである。

われわれの聖賢の学の工夫というものもまた、丁度これと同じようなもので、急に効果は見えなくても、絶えず努力を続けて行くうちに必ず進歩の巧が見えるものである。

〔付記〕

かつて慶應義塾大学の塾長であった小泉信三博士は、ある本の中でこう述べている。

「本を読んでものを考えた人と、まったく本を読まない人とは明かに顔が違う。読書家は、精神を集中して細字を見るため、その目に特殊な光を生じ、これが読書家の顔をつくる。しかし、ひとり眼光に限らない。偉大な作家、思想家の大著を潜心熟読することは人を別心たらしめる。これが人の顔にあらわれるのは当然であろう。」

顔は心を現わすという。嘘はつけないものである。

P152 ~ 153

〔コメント〕

「学の工夫」とは「学び方を学ぶ(Learning To Learn ラーニング・トゥ・ラーン)能力を身につけるということ。小泉信三先生の読書人の顔にあらわれるのは当然という議論は興味深い。人格形成の上で読書による思慮深さを作り上げることは教育の成果の一つと考える。

- 2009年8月11日林明夫記 -